

ウクライナ避難者支援

のための情報共有会議

— 第24回議事メモ

日時：2024年8月26日（月）18:30～20:30

場所：オンラインzoom

参加者：38名

* 団体、個人名については敬称略にて掲載しております。

開催挨拶

あいち・なごやウクライナ避難者支援ネットワーク/
認定NPO法人レスキューストックヤード(RSY) 代表理事 栗田暢之

南海トラフの臨時情報が出された。災害救援団体として、避難民の方々に詳しくお伝えできなかったことを後悔している。全くわからないという方、すぐに名古屋に地震がくるのではと思った方もいるのではないか。今後はこうした情報をしっかり翻訳してわかりやすく伝えるべきと思っている。台風10号の様子は今後の情報に注目。台風については、ボルシチ(公式 LINE)で備えなどについてを発信した。

引き続き、皆さんの協力が不可欠であるが、焦点を絞って対応していく必要を感じている。個別対応が後を絶たない状況。一人一人にどんな支援が必要か考えていくべきだ。あいち・なごやウクライナ避難者支援ネットワークの活動に加えて、地域の皆様方の協力をお願いしたい。

自治体、支援団体からの報告と質疑

<名古屋市 国際交流課 西川さん>

名古屋市では、避難民支援個別ではレスキューストックヤードに業務委託しているため、全体の報告をする月の避難民は81名。前月とは変わらないが、8月は出入国があったため、人数に変動有り。

・昨日、ウクライナ独立記念日に合わせて「ウクライナデー名古屋」というイベントを開催。ヴァレニキを参加した市民と一緒に盛り付けるようなイベントを行った。読売新聞にも掲載されこのような報道が少なくなってきた中、引き続き関心を持ってもらえるように働きかけたい。

・就労に関しては、多文化共生リソースセンター東海やRSYに協力を頂いている。「つどいの場」で避難民のキャリアアップのための説明会を行った。また9/31には避難民の長期就労に関するイベントを企業と協力して開催する。

・(愛知県支援に関してコメント)これまで、愛知県支援を受けるためには、パスポートはKRという押印が必要だったが、要綱を改定していただいて「補完的保護対象者」認定があれば、支援を受けることができるようになった。現状に沿った改定で、ぜひみなさんに知っていただきたい。

<愛知県 多文化共生推進室 都築さん、杉本さん>

8月1日現在の避難民の人数について、愛知県内は21人、81世帯。受入れ市町が11→12になった。日本に来て家族が増えた場合、避難民の数にはカウントされないが、出入国管理庁によると支援は家族と同様に受けられる。愛知県も同様の対応をしていく。

愛知県の生活支援事業について、前回の会議で報告した内容と変わりはないが、次の4つを行っている。

①生活一時金の支給。生活用品等を購入するための費用として1世帯0万円。3人以上世帯は10万円を加算。(ex:4人家族なら40万円。)

②日本語学習に必要な物品(SIMカード)の支給とタブレット端末の貸与。

③寄付物品の受付/配送。今年度はまだ寄付物品の提供がないため配送ができていない。

●寄付募集は2024年9月30日まで。しかし、集まっていないため延長する可能性あり。

今年度は昨年度以上に寄付の集まりが厳しくなっている。物品配送に関しても、具体的な企業等からの申し出もなく厳しい状況である。キャッシュレス決済により、寄付をしていただきやすい環境づくりをしている。寄付の使い道は生活一時金支給であるのでぜひ多くの方に協力をいただきたい。

JUCA(NPO法人日本ウクライナ文化協会)

副理事長 榊原ナターリアさん

・今月のイベント等の報告。夏休みだったので子どものキャンプで和歌山県南紀白浜に行った(当日の様子を写した動画)。子ども達に日本の文化、歴史、伝統について知ってもらいたい。できるだけ多くコミュニケーションとってもらえるように企画を立てた。子どもたちも心から楽しみ、ストレス発散になった。ウクライナでは長い夏の期間を使ってキャンプ行く習慣があるため、今後も行なっていきたい。

・8/25名古屋市主催のウクライナデー、ウクライナ避難民の方が料理、デザートを振る舞った。

・8/31peace for ukraineが毎月のスタンディングアピールを行うのでご協力をお願いしたい。

・多くの方が豊田市から名古屋市へ引っ越している。①市営住宅の申請、②仕事、③勉強、この3つの支援が主となっている。

・来月、新たに日本語勉強クラスが始まる。夏に開催した前回のクラスが難しかったというお声をいただいたので今回のクラスも同じレベルで行いたい。日本語能力試験N4のレベルを目指す。受講生を現在募集中。

・毎月子どものウクライナ文化教室／ヨガクラスを実施。体にも精神的にも良い。先生が色々なテーマを考えて新しいこと、面白いことを教えてくれている。ウクライナ避難民は無料、在日ウクライナ人や日本人は有料で受講可能。来月は新舞子で行う。興味のある人は声をかけて欲しい。

・毎月「つどいの場」を開催。今月は「NPO法人にわたりの会」による日本語講座で漢字などを勉強した。15時からキャリア支援をしているNPO法人WELgeeも参加、今回は名古屋市だけでなく、愛知県の別の市町から参加した若者も多かったため、就職のサポートでこのNPOにお世話になる方がいると思われる。

あいち・なごやウクライナ避難者支援ネットワーク活動報告

(事務局:レスキューストックヤード(RSY)加藤)

- ・昨日のウクライナデーに参加し、フルーツのヴァレニキを作って実際に食べることができ大変美味しかった、多くの方にウクライナ料理を召し上がっていただきたい。
- ・補完的保護対象者認定制度を申請する方が大変増えており、実際に認定を受けている方も多くいる。先ほど話があった愛知県の支援要綱変更(補完的保護認定に関して)があり、「助かった」という避難者の声を実際に聞いている。お礼を申し上げたい。
- ・台風の情報について、公式 LINEで情報提供(台風とは、必要な備えなど)をした。
- ・避難者の合唱グループが 8/30に千種文化劇場コンサートを開催する、チケットはまだ購入可能なのでぜひ御覧いただきたい。
- ・昨年に続き、11月に1泊2日の大交流会を企画。昨年は 70数名の避難者の方にお越しいただいた。開催目的は避難生活でのストレスを解消できることがメインだが、気軽に相談できる場所がある、繋ぎ先があることを知ってもらうために、相談会も開催している。相談ごとが解決する糸口が見つかれば、自治体にもご案内済み。避難者の方も第 1報として、公式 LINEに流した。今月末から来月の頭にかけて参加の申込フォームを流す。
- ・次に登壇いただくクレイン英学校の紹介。クレインさんは、避難開始当初から物資の支援や仕分け、イベントの開催、 JUCAと一緒に旅行の企画など多くのご協力を頂いている。今日のお話は、避難者の心のケアについて。避難者のお子さんで日本の学校になじめないが日本人と交流したいという子どもを対象にした、英語でのコミュニケーションが取れる場所を作って頂いた。

クレイン英学校による交流会報告

クレイン英学校 原田智子さん

- ・名古屋市昭和区で英語塾を運営。生徒の主な年齢層は中高生。英語を受験勉強だけのものではなく、他者を理解するツールとして英語習得をしてほしい、グローバルに世界とつながる手段にを目的にしている。日頃から8月6日広島訪問、カンボジアに訪問し紛争の歴史を学ぶなどの取り組みをしている。
- ・ウクライナで戦争が開始してから、学校の保護者や学生にも協力してもらって物資の支援等を行ってきた。学生も一緒に物資を並べるなどの活動もしてきた。JUCAと協力し、2年前に広島ピースツアーを行った。子ども達の笑顔が素敵で、心の交流は本当に大事だと思った。日本の中高生たちがウクライナで起きている現状をより身近に感じられる。
- ・今回交流会に参加したJKくんは、ウクライナのオンライン授業を受けているが課題提出型の授業とのことでオンラインでも同世代との交流があまりないよう。本人もウクライナで一番好きな教科は英語と答えてくれたので、ぜひ当校と交流するのがぴったりではないかと思った。今回の企画の目的として「本人と家族の心理的サポート」「英語学習サポート」「同世代との交流機会の提供」と設定した。
- ・英語での交流に興味がある子どもたちを集めLINEグループを作り、日程調整から英語で子どもたち自身が行った。
- ・初日は7月14日、日本の男子高校生3名とJKくんが参加。一緒にコンビニ買い物に行ったりカードゲームをするなどして1-2時間交流した。2日目はちょうどアメリカの高校生が親戚を訪ねて名古屋に来ており、アメリカ、日本、ウクライナの学校の違いなどを交流できる機会になり3時間ほど会話が進んでいた。次回は、ちょうど明日開催予定。カナダから帰国している学生も来てくれるので、今後もうこういったカジュアルに交流できる機会を作れるのではないかと思っている。

避難者の現状について

あいち・なごやウクライナ避難者支援ネットワーク コアメンバー 向井忍

・2年8カ月が経過して、避難者が置かれている大枠の現状を報告する。日本に入国したウクライナ人は 2667人、同日に日本に在留しているのは2005人なので、662人が既に帰国または第3国へ出国したことがわかる(入管庁統計、7月31日現在)。4人に1人が帰国、または第3国を選択されている。

・統計をグラフにしたところ、今年に入って大きな変化があることが伺える。今年に入って政府が受け入れ人数をセーブしている。定住を意識しながら、日本に避難している方がどういう道を選ぶか、大きな選択が求められていると思う。愛知県内の受け入れ自治体は最大で 18だったが、現在は13となっている。愛知県に入って名古屋市に転居するというケースもある。どういう生活をするかの選択による移動が始まっているようだ。

・身元保証人は、親族の他に、個人、NPO、大学もある。ネットワークでは東海3県の自治体を訪問しながら、様々な方が支援を進めていることを把握してきた。今クレイン英学校さんから報告があったように、特に子どもたちは、進路と言葉、学習の選択をしながら進めている。定住支援プログラムが始まっていて、避難者の人数が増えるというより、選択の時期に来ている。帰国ではない方は、どのような目標を持っているのか、侵攻が続いている中でそれぞれが目標と希望をどう持つのか。選択の支援が重要になっているのではないかと。

・避難者からどのような要望が来ているのかをざっとまとめたところ右記の項目があった(支援制度の見直し、進学、言語、定住支援、教育、仕事、健康)。具体的には、住宅支援はいつまでか、定住のための仕事を持ちたい。その結果として、将来と現在の不安、帰りたけれど帰れない不安、眠れないなど複数の心身の不安がある。病院に通院している方も少なくない。背景には、受け入れがどうなるのか支援がどうなるのか見通しが無い。ウクライナのカウンセリングを受けている方もいるだろう。ネットワークや JUCAに相談できている方はまだ良いが、もしかしたら孤立している方もいるのではないかと。実際に、最近も支援団体との繋がりがほぼなかったという方もいらっしゃったようだ。その点では、先の見通しが無いということが、心身への負担となり難しい時期に来ている。このあとゲストのお話からどのようなケアが必要か考えたい。

難民避難民背景を持つ方への心理サポート～支援者の視点から～

社会福祉法人日本国際社会事業団(ISSJ)常務理事 石川美絵子さん

・難民避難民の方、外国人の方のいろいろな相談をうけている。その中でメンタルヘルスについても相談がある。本日は支援をする側として、どのように状況判断し、どのように支援するのかという話をしたい。一件ずつ状況が違うので、こうすればよいということはない。ディスカッションできればと思う。

・日本国際社会事業団(ISSJ)について:人々が国境を超えることで生じる様々な状況の相談に応じている。本部はジュネーブ。ソーシャルワークを行うネットワーク組織の日本支部である。最初にボートピープル(インドシナ難民)と呼ばれた方々が到着して以来、難民支援に取り組む。2021年までUNHCRのパートナー団体として難民・難民申請者のメンタルヘルス支援と収容所訪問を実施。現在は大きく分けると、「個別支援(定住支援)」、「コミュニティ支援」の事業を行っている。

<難民、避難民特有の背景について>

1. 強制移動(本人に意志によらず、強制的に移動せざるを得なかった)
2. 喪失を伴う(なにかしらの喪失を伴っている可能性が非常に大きい)
3. 帰国困難(将来展望を持ちにくい)

・移動のフェーズは3つに分かれる。移動前、移動中、移動後。移動前に喪失やトラウマ的な出来事と、迫害がある。そこにいられなくなって、移動を開始。移動前から移動後までずっとストレスにさらされている。移動の方法は様々だが、安全な状態ではなく、隣国に逃げる、難民キャンプに行く、他国へ移動する等があると思うが、自分の文化から離れて違うところに行くということは、ストレスが続いているところに新たに適応の課題が生じる。ストレスの度合いがさらに高まる。ただその度合いは、個人差が大きい。元々楽天的な人、自己肯定感が高い人。支援がすぐに受けられたかどうかで、適応の速度は変わってくる。辿り着いた場所が安全であるということも大きい。戦争や紛争をしていないという安全もあるが経済的な安定やしばらく家に暮らすことができるという意味での安全もある。

難民避難民背景を持つ方への心理サポート～支援者の視点から～

社会福祉法人日本国際社会事業団(ISSJ)常務理事 石川美絵子さん

2:喪失に関して:「曖昧な喪失」という概念ーポーリン・ボス ～存在と不在の間ー不明確な喪失～

- ・さよならのない別れ(身体的(物理的)には存在していないが、心理的には存在している状態)-破壊された故郷、離婚による親の不在、など
- ・別れのないさよなら(身体的(物理的)には存在しているが、心理的には存在していない状態)-認知症、子どもが実家を出て自立、会いたいけど会えない、など

難民避難民の方は目に見えての喪失ではなく、もっとあいまいな喪失が多い。本人が自覚していない、自分が失ったという感覚がない、会いたいけど会えない、行きたいけど行けないということも心に負担をかける要素になる。

- レジリエンス(回復力)ー 人に本来備わっている、困難な状況下でも健康と保つ力(適応と同じで個人差が大きい) ←関係性(安定した愛着関係、周囲の人との良好な関係)、個人的要素(自己肯定感、チャレンジ精神、楽天性、信仰、ユーモア)
- 明確な喪失、曖昧な喪失、生活環境の変化がストレスになる。一方、レジリエンスがあるので、喪失に暮れるだけではなく、それを力にして回復できるというのが人間に備わった力であると言われている。

難民避難民背景を持つ方への心理サポート～支援者の視点から～

社会福祉法人日本国際社会事業団(ISSJ)常務理事 石川美絵子さん

<移住後の課題とメンタルヘルス>

・移住前のトラウマだけでなく、移住後の状況が大きな影響を与えると様々な研究で明らかになっている。一 就労、安定的な家の確保、言語、難民申請のプロセス(長引くほど悪影響、不認定な収容体験を含む)、移動先での差別や偏見、対人関係、支援リソースにつなげられるか、入管政策や在留資格の安定性、家族との分離、本国の情勢(例:ミャンマーの方はクーデターが起きた時に多くの方が眠れないと訴えた。母国が楽観的な状況ではないときは距離があってもストレスになる)このような長期的なストレスがあると、家族に影響を及ぼしたり、DVになったりすることもある。

●支援の場で出会った精神障害の方々(うつ病、適応障害、パニック障害、統合失調症、知的障害、 PTSD)

・うつ病(最も多い)、適応障害(うつ病となかなか見分けがつかず、かなさる部分もある)この2つが難民避難民の方が多くは見分けがつかない。うつ病はずっと脳がアイドリング状態、薬で症状を緩和するしかなく通院の必要がある。適応障害は、あるストレスに晒されると過剰に反応する。例えば出勤時に症状が出るが、土日は症状が出ないということもあり、必ずしも薬が必要ということにならないケースもある。もちろん素人判断はできないが、すべて薬物治療が必要というわけではない。

・パニック障害や統合失調症の場合は、病院に行くしかない。普通に話していて(見張られている、声が聞こえるなど)普通に話している中で非現実的なことをいう場合は、もしかしてということになる。統合失調症は悪化すると大変になるので薬で安定させる必要がある。発達障害もわかりにくい、大方の人がしない行動をとってしまうような場合は疑うこともある。発達障害かもしれないと思っても、必ずしも病院に行って診断をもらう必要はない。当人は病識がない中で、あなたは障がい者ですということを外国の方に言うと、急に想像していないラベルを貼られたようなスティグマ感じて、支援関係が切れてしまうこともある。関係者の中で特性を共有しつつ、周りが対応していく。

難民避難民背景を持つ方への心理サポート～支援者の視点から～

社会福祉法人日本国際社会事業団(ISSJ)常務理事 石川美絵子さん

・知的障害は場合によっては手帳が出ることもあるので、見極めが必要。PTSDは難民避難民の方は患っている可能性は高い。短期で終わるものではないが、どのくらいの時間が経っているかということも判断の目安になる。以前、ソマリアの方で眠れないので精神科に行きたいと同行したが、心理面談でPTSDがあるとわかり、どうして事前に教えてくれなかったんだと心理士から注意を受けたことがあった。心理面談で心の中をほじくると危険なことがあるためである。しかし、その人の場合は事前には全くわからなかった。

・外国の方を精神科連れて行く場合、国によってすごく抵抗がある場合がある(ウクライナはない方が多いと思う)。文化や教育レベルによる。教育レベルのある方は精神科について知識を持っていることがある。また、病識がない人を病院に連れて行くのは本当に大変。連れていく場合は「食べられるか」、「寝られるか」などについての質問をして「ずっと頭痛が続いている・・・」等の答えが返ってきた場合に、病院に相談しようとなる。その後もすぐに精神科ではなくて、よく話を聞いてくれる、外国の方に詳しい先生がいるからと誘うなどのテクニックがいる。

●病院かカウンセリングか？

薬が必要な症状かカウンセリングで対応できるか、医師でないと判断が難しい。一方、病院に行くのは時間がかかり予約も大変。支援者がどういうリソースにつながっているかで対応も変わる。もし、心理士につながっているのであれば状況判断してもらい、まずカウンセリングしましょう、病院に行きましょうとアドバイスしてもらうのがよい。

通訳について。愛知県の状況がわからないが、ウクライナの心理士の方が日本にいらっしゃるの、オンラインで協力してもらえるのではないか。心理やメンタルヘルスに通訳をいれる場合は、おそらく同国の人になるのではないかと。ただ、同国の人であっても知られたくないという人もいますので、まずはご本人に通訳について了承を得ること。いきなり病院に行ったら同国の方が通訳で来ていて、嫌だとなる可能性もある。もちろん、かかりつけ病院で精神的なことをみってくれる場合はそれもよい。

●希死念慮がある、自傷他害のおそれがある場合

23条通報といって措置入院となる。警察に通報すると、保健所を経て入院につなげることもできる(地域によっては入院にならないケースもあるよう)。もう死ぬと言って非常に緊迫している場合は、とにかくどこかに通報する(役所、警察等)。支援者が一人で抱える状況ではなく何かあってからでは遅い。

難民避難民背景を持つ方への心理サポート～支援者の視点から～

社会福祉法人日本国際社会事業団(ISSJ)常務理事 石川美絵子さん

<身体表現性障害>

心の不調が体に出ることがある(国民性・民族性も影響しているのではないか)。病院にいても見つからない、胃が痛いと検査しても何も異常がない。入管に收容されたあとに足が動かなくなったケースもある。筋力が急に失われたり、目が見えない、耳が聞こえないといった感覚に影響が出る場合もある。身体的な病気ではないとまず確定する必要があるので、その身体的症状がある科にかかる。診察の結果、何も無い、気のせいと言われたときに、患者がものすごく怒ったことがあった。原因が見つからなかったとしても決めつけないで可能性をつぶしていくことが大事。見つかるまで様々な行き病院ショッピング状態になる人もいるが、それをさせてしまうことは良くないので心を休ませるなど、病院以外の対応をする必要もある。

<医療へのアクセスのハードル>

かかりたい精神科医＝外国人の精神障害(多文化)に知見がある。難民・避難民の背景に知見(理解)がある医師だと思う。しかし、日本全国にこういう医師がいるわけではなく、どこにいるか見つけるのは難しい。一方、外国人は全くわからないという人だと診断が変わってくるリスクもある。わかってくださる医者に診てほしいが、その場合、大方の支援者が考えるのは大きな病院だと思う。しかし、大学病院などの地域医療支援病院にかかるには紹介状が必要。それへの対応は地域事情によると思う。自分の場合は、知っている心理士に先ず診てもらって紹介状をもらっている。しかし大きな病院の予約手続きは、日本人でないとできないような複雑さで、予約してから診察日まで時間がかかり、診察自体も半日かかる。なお且つ通訳は、オンラインでもよいか、アプリがあるか、医師は英語ができるか等ハードルが高い。さらには児童精神科は、予約できるのが半年先など非常にハードルが高い。こういう状況では医療ですべてを解決することは難しい。

難民避難民背景を持つ方への心理サポート～支援者の視点から～

社会福祉法人日本国際社会事業団(ISSJ)常務理事 石川美絵子さん

<生活環境の調整も大切>

- ・薬だけの回復は難しい。実際今関わっているケースでも、薬でかなり回復していて、この先は生活環境の改善が必要だと医師から言われているケースもある。人間関係の修復、セラピー的な気晴らし(遠出、森林浴、(子どもの場合は)粘土、アニマル、絵を描く、音楽...)専門的でなくても、ちょっとしたことで支援者が機会を作るということも可能。ずっと同じことを考えてストレスを抱えているよりは、一旦注意を別に向けるために有効。
- ・何か抱えていると思ったときに介入は早い方がよい。症状が悪化、支援に繋いだ矢先に帰国した例もある。
- ・難民避難民の方は見通しを立てるのが困難と説明したが、先行き不安がすごく大きな影響を及ぼす。難しい時は短期短期で考えることが見通しにつながる。コントロールできない事態に圧倒され打ちのめされている状態が、適応障害やうつにつながる。それを短期に解決して次をやっていくことで、コントロールできることに変える。中長期の見通しであればオプションを選ぶとどうなるかの可能性を説明し、自己決定してもらおう。それを実行してこうなったらその先のオプションというように見通しを提示して自己決定をするサポートをする。日本人は不確定なことはあまり言わないが、部分的であっても明確な部分を提示して、不確定要素を低減する支援もできるのでは。
- ・物事のとらえ方(認知)で非現実的な認知をする方もいる。認知や解釈は人それぞれなので、あまりに不健康な認知や解釈をする方に対しては、専門的や他の人の協力を得て、認知を変えていくこともできると思う。

ブレイクアウトルーム共有

ブレイクアウトルームで話し合った内容について、全体共有を行った。

- ・施設で勤務している方からの感想、日本人でも精神的なサポートは難しい。外国人の方はさらに難しい要素が加わる。
- ・ISSJの資金面について質問があり複数の助成金を得ていると回答があった。
- ・実際の同行支援では、薬が欲しい、カウンセリングは受けたくないが、病院に行きたいというケースが多く、病院選びが難しい。今後も石川さんに相談できればありがたい。
- ・レジリエンスの力をどうつけていくか、それは支援者へのサポートにもつながる。日本人のサポートをしてもすごく時間がかかる。当事者に理解をしてもらえなかった経験がある。自身も含めたメンタルヘルスの体験などを共有した。今日の話をもとに活用していきたい。石川さんの報告から普段の支援の中で、できることも多いと感じた。
- ・職場に避難者の方がいるが、気持ちを無視して仕事をするのもあって心苦しい。
- ・自治体職員の方より。もし避難者の方に何かあったら、ネットワークに相談したい。
- ・病院に行きたいという相談があってもどの程度なのか支援者側が把握するのに時間がかかる。
- ・避難者の方にとって日本で医師を探すのは難しい。紹介状はウクライナと全く違うシステムのため理解が難しい。
- ・(JUCAの方より) 侵攻が始まった直後、ほぼ全員精神的な負担を抱えていた。3年目になり、自分で折り合いをつけた人も多いかなという印象だが、苦しい方の中には帰国という選択肢を選んだ方もいるだろうという見方も紹介された。
- ・(以下、石川さんより) 元兵士の支援は経験がないが、PTSDはおそらくあるだろう。かなり以前の経験だから違うとは言えない。専門家が場を作って扱うべきでうっかり触れてはいけない。症状としては、悪夢を見続ける、わけもなく泣いてしまう等、フラッシュバックがあるかないかというのは遠まわしでも本人に聞くことができる。人には言えない経験をしたという発言があったりする場合に医療に繋ぐことを考える。素人がむやみに触れないこと。
- ・多文化間精神医学会 (<https://www.jstp.net/>) の先生方に聞くと地域の医師を教えてくださいと教える可能性もある。
- ・支援者ケアの事例について。ISSJは事業としてはやってはいないが、バーンアウトや抱え込みについて集まりで話すことがある。支援者に共通する課題なので、勉強会などする際には参加したりお話することは可能。

ウクライナ避難者支援のための寄付にご協力をお願いします

郵便振替00810-7-215694 口座名義:レスキューストックヤード

(ゆうちょ銀行以外の金融機関からのお振込み)

ゆうちょ銀行(金融機関コード: 9900)・〇八九(ゼロハチキュウ)店(店番: 089)

当座 0215694 口座名義:レスキューストックヤード

※領収書は認定NPO法人レスキューストックヤードからの発行となります。